

市長の伊賀じまん

— 伊賀の舟便 —



皆さんは、大阪から伊賀まで舟便が届いていたことをご存じですか。

徒歩での交通が主流の江戸時代、大阪や奈良、大津や京都など、伊賀はどの方面に向かうにも大変便利な土地柄でした。しかし、伊賀は徒歩だけではなく、川港の国でもありました。長田橋のたもとに「淀川通航終点の碑」が残されています。

当時は、伊賀の米や麦などを大阪の蔵屋敷まで運び、戻る舟が塩などを運んでいました。また、さらに長田川をさかのぼって阿保まで行っていたという説もあります。舟便で運ばれた塩の専売権を得ていたのが、道頓堀川の開通に功績のある安井家でした。西蓮寺(長田)や上野天神宮の灯籠には、寄進者の安井九兵衛の名前が刻まれています。



長田川から現在の京都府相楽郡の笠置までの川筋を全て記録した

◀ 淀川通航終点の碑。大阪との間で舟便が行き来していた。

▶ 「伊州上野長田川筋城州笠置迄川絵図」(上・中・下巻)。写真は、上巻の鯛ヶ瀬(島ヶ原)周辺。(伊山文庫所蔵)



「伊州上野長田川筋城州笠置迄川絵図」という地図があります。絵師の速水春暁斎の作で、川のどこに岩があってどのように曲がっているかなどが細やかに再現され、地名や周辺の風景、川のうねりまでも緻密に描きこまれていて非常に見事です。

かつての舟便の遺産が残されていることは、今の時代にあっても大変貴重なことだと思います。河川の歴史を見るだけでも、今では想像のできない現実が広がっていたのです。

川絵図を眺めて当時の河川交通に想いを馳せると、伊賀の可能性を感じることができます。それは、目の前に見えることだけで物事を捉えてはいけないということを考えさせられるからです。河川に限らず、歴史を勉強することで、何を未来に生かせるのかを学び、生かしていかなければならない。地方創生が叫ばれる中、こういった可能性を見つめなおすことで、地域の発展性が見えてくるのではないのでしょうか。

(伊賀市長 岡本 栄)

伊賀市の文化財 91

国登録有形文化財 (建造物)

中森家住宅 主屋・離れ・前蔵・蔵・門及び土塀・井戸屋形及び板塀 (上野玄蕃町)

上野玄蕃町は、上野城の外堀東側に位置し、かつて藤堂藩侍大将、藤堂新七郎家の下屋敷がありました。中森家は、藤堂新七郎家の陪臣で、1870年(明治3年)の藤堂新七郎家臣屋敷図に現在地と同じ場所に「中森孫兵衛」の名前が確認できます。

通りに面する前蔵や門、土塀などが歴史的な景観を形成しています。

主屋の出入口は南向きで門とは直交しています。建設時期は江戸末期とされ、当初は門の正面に東向きに出入口があったものを、昭和初期の洋室増築時に現在のように改築しました。間取りは和室四間の基本形に台所を加えたもので、上野城下町に現存するほかの武家屋敷に比べると規模は小さめですが、屋根の棟に鳥衾が乗り、鬼瓦には中森家の家紋が入られるなど、格式を重んじる構成です。

主屋西の縁に続けて、大正初期に新座敷と呼ばれる離れが増築されました。六畳二間続きで、主屋に比べると造りは贅沢なものです。特に奥



▲中森家住宅の外観

の座敷の床には付書院が備えられ、菱模様の組子細工の欄間が嵌められています。江戸期の質素な主屋に対して、大正期の贅沢な離れの造りが対照的です。

敷地内にはこのほかに、蔵・井戸があり、蔵は敷地の西端に位置し、高さのあるその姿は、旧外堀側から見える屋敷の景観を整えています。井戸屋形や板塀は、敷地内で中庭と外庭を隔てる役目を果たしています。中森家住宅のように、主屋・蔵・門・塀がまとまって残っている屋敷は少なく、武家屋敷のたたくまいを色濃く残す建物群として、平成26年12月19日に、国の登録有形文化財に登録されました。

* 陪臣：主人を持つ武士が自らの家臣として召し抱えた武士。家臣の家臣。

文化財課

☎ 47・1285 FAX 47・1290